

がん体験者コーディネーターの人材養成プログラムに保険点数を

NPO法人 ブーゲンビリア
理事長 内田 絵子

医療制度が大きく変わりつつある中、患者の視点に立った質の高い医療を受けられる体制の構築がもとめられています。それには、患者が自立し、自ら学び、患者の質を上げていき、医療政策に関われるステークホルダーとしての役割分担が担えるよう成長しなければなりません。

医療提供者、各関係者等との信頼関係、協力関係を築きながら患者が能動的に医療政策、に参画し、患者の声を届けることが医療を動かす一助になります。

医療消費者としての自覚を促す啓蒙活動や地道な草の根活動が医療費抑制、削減につながると信じて患者の立場から、声を上げつづけていきます。

<がん体験者コーディネーター人材養成の取り組み>

(1) がん診療連携拠点病院にアンケート形式の調査の実施

医療消費者、がんサバイバー、患者アドボケイトとして、3 団体「癌と共に生きる会、どんぐりの会、NPO法人ブーゲンビリア」が中心となってアンケート形式の調査票を作成しました。

- 東京都の10のがん診療連携拠点病院に訪問し患者の視点から、体験視察、意識調査を開始。
- 患者相談窓口の取り組み方、がん治療の情報、緩和のあり方等をチェックし患者の満足度を測るため、患者相談窓口の役割の大切さや、患者やその家族に寄り添う視点を取り入れ作成。
- 後日、調査表の回答を解析し各関係者にフィードバックし共通の認識をもつ。
(数県の患者会からも申し込みがあり共通の調査票でデータを取る予定です)

(2) 体験者コーディネーターの人材養成講座の実施から見えてきたもの

当会の活動のひとつに、今年度、医療者、コメディカル、患者団体等三つのステークホルダーと立ち上げた「乳がん体験者コーディネーター養成講座」があります。

- 患者相互の心理的サポート、マイカルテの作成、質問の仕方等を学ぶ事により患者の問題意識の向上。

- 患者同士で心のサポートや不安感を支える事により、生き生きと治療が出来たり、うつ的感情が回避されたり健康の回復に役立つ。

(3) 1年間の講座による患者や患者団体の質の向上

- 自分達はあくまでも体験者コーディネーターである。医療相談になってはいけない。
- 治療方法で悩んでいる人には、主治医とのコミュニケーションを取るようにサポートしていく。セカンドオピニオンはその次の段階に。
- 相談を通して家族の問題が浮き彫りになることもある。きちんと話し合っ根本的な問題に気づかせる事も大切。
- 誰かにとって最善であったことが、相談者に当てはまるとは限らない。
- 相談に来たのが家族であっても、治療を受ける本人の意思を第一に考える等々。

がんの治療法は日々進化し、多様化し、患者の価値観に基づいた患者自身による治療法の選択が必要となっています。また、がんと言う病が慢性疾患、生活習慣病のひとつと言う捉え方がされている昨今患者自身によるセルフマネジメントが重要となってきます。

しかし現実には、患者と医師の間には「質問したくても忙しそうできなかつたり」「話しかけにくい」「聞いてもらえないのでは」「状況をわきまえた適切な質問の仕方がわからない」と言ったコミュニケーション不足が存在したり、また、「医師の説明を受けても専門的な内容のため理解しにくい」といった声が多く聞かれます。

患者の声、患者家族の声を受け止め、患者と医療提供者の相互理解を促進するための患者支援センター、患者相談窓口の機能の充実が急務です。

新たな、患者と医療者をつなぐ架け橋となり更なる患者の満足度を上げる質の高い医療を創り出すためにも、がんサイバーの体験やノウハウを生かした体験者コーディネーター人材養成講座プログラム作りが問題解決の方策の一助となると考えます。

以上のことから下記のことを提言、要望致します。

- 「がん体験者コーディネーター人材養成プログラム」の各機関との対等な協同設置。
(行政、医療提供者、大学機関、患者団体、患者家族、有識者等)
- 一定期間のプログラムの修了者に認定証を発行し、継続講習を可能とする。
- 認定者が各相談支援センター、相談窓口等でコメディカル等の有資格者のアシスタントとして働き、診療点数がつくようなシステムを整備する。
- 認定者が患者アドボケートとして地域医療の場に参画できるシステムの整備。